

# 八戸工業大学のドイツ語教育

— 開講時アンケート調査の結果から —

小林 繁吉\*

## Unterrichtsmethode im Deutschen an der Technischen Hochschule in Hachinohe (HIT)

— Untersuchung der Umfrageergebnisse in der ersten Unterrichtsstunde im Deutschen für Anfängerkurs —

Shigekichi KOBAYASHI\*

### Abstract

In diesem Bericht handelt es sich um Ergebnisse der von April 1994 bis April 2003 zehnjährigen Umfragen durch das Handzeichen in der ersten Deutschunterrichtsstunde für Erstimmatrikulierte. Der Bericht hier behandelt folgende Fragen: erstens den Abriss und das Ziel der oben erwähnten Umfrage, graphische Darstellung und klare Erkenntnis der betreffenden Umfrageergebnisse und letztens Betrachtung über die Anwendung der Umfrageergebnisse auf den praktischen Deutschunterricht für den Anfängerkurs.

**Key words:** Deutsch, Unterricht, Umfrage, Konversation, Erstimmatrikulierte

### 1. はじめに

本報告は、平成6年(1994年)4月より平成15年(2003年)4月まで10年間に亘って、フレッシュマン(新1年生)に対して最初の授業に行う開講時挙手アンケートの結果について記述したものである。実施の回答者数は報告者(執筆者本人)担当のクラスの受講学生のみであり、ドイツ語受講の新1年生全員を対象にしたものではない。以下にそのおおよその回答者数の割合を記すと、1994年~1998年は約30%、1999年は約33%、2000年は約50%、2001年は約40%、2002年~2003年は約50%となっている。

### 2. アンケートの概要と目的

初修外国語教育における新入生に対する受講希望についてのアンケート調査は非常に重要で、実は、授業の方針を変更し、教授法の方向性を変える程の意味付けが可能なものである。なぜなら、それは受講希望者の動機付けと密接に関連しているものであり、教授者側のあらかじめ意図していた教育方針と必ずしも一致しているとは限らないのである。教師側がシラバス(講義要目)に記した内容を見て、勿論、学生は受講を決定するのであるが、初心者に対するはじめての外国語教育においては、そして、本学(八戸工業大学)のように、新入生に対して週1回の外国語すなわちドイツ語授業しか設置されていない場合は、まさに、導入教育として、学生の動機付けを強化するような方策が取られなければならない。もう少し意図を明瞭にして言

---

平成15年12月19日受理

\* 総合教育センター・教授

えば、第二外国語の初学者における教育に関して、日本での週1回90分の授業を行うという状況においては、独文科あるいは類似のドイツ語学科等において、新入生に対して週5回程の授業が用意されている場合と区別して考えなければならない。つまり、学習すべき目標を極度に限定して、限定的目標を設定して教授した方がより成果が上がるという考えを取るのである。

一般的に、学生達がなぜドイツ語の受講を選択するのかの理由は実に様々である。ここでそのことについて述べるのは、本報告の意図するところではないので、別の機会に論じることにして、ほんの一端を紹介すると、「ドイツの文化・社会・歴史への興味」や「大学院進学のため」や、「ドイツ語そのものへの関心」「旅行でドイツへ行った時のため」「2006年ドイツで開催のワールドカップサッカーを見に行きたい。」など種々様々である。

この報告で扱う〈初修ドイツ語受講者への挙手アンケート〉は、中学・高校を通して、外国語として英語を勉強してきたことを踏まえて、はじめての外国語であるドイツ語をどのように学習していきたいのか、どの点に重点を置いて学んでいきたいのかを問うている。外国語学習においてよく言われる「文法中心」か「講読(訳読)中心」か、「会話中心」か「独作文中心」か、「教養中心」か「その他中心」かの6項目について、特に力点を置いて受講したい項目一つを原則として選んでもらったのであるが、無論、二つ選択してもよいし、特別な場合は三つ選んでもよいものとした。これが「複数回答可」の意味である。「文法」「講読(訳読)」「会話」「独作文」については、説明の必要はないと思うが、「教養」に関しては、ドイツ語を学んでいく際に、ドイツの文化や社会や歴史、また、ドイツについての様々な知識や情報を紹介するということがあり、ドイツ語などのことばそのものを学習していくに際して、必ず附随してくる言語(ことばそのもの)を支える背景的知識など重要な項目のことである。「その他」は、上記「文法」「講

読(訳読)」「会話」「独作文」「教養」のいずれにも属さないが、受講者本人にとって大事な、思い入れのある項目とし、具体的に挙げてもらうことにした。以上のようにアンケート項目を設定し、挙手によって意志表示をしてもらい、記録したものが本報告で扱うアンケート調査の結果である。

前述したように、受講者が初回授業時に学習項目の重点項目についての希望や要望を明らかにすることは、授業を成立させ、運営していく上で大切なことである。しかしながら、受講の理由付けや動機付け程の多様性はないにしろ、この6項目(実際は5項目とみなしてよい。)に関するアンケート調査でも、ごく少数の者だけが重点項目として選んだものがあり、教師としては、この少数者の意志表示の扱いに苦慮することがある。この点については後述する。

さて、それではまず、10年間に亘る新入生の初回授業時〈開講時挙手アンケート〉の結果を以下に報告する。

表示項目について述べると、4/18~4/28という表示は、4月18日から4月28日の間にアンケートを実施したということを表わし、回答者数とは、受講者数(回答者総数)を表わし、回答者数は常に100%であり、「文法」項目の18.0%は文法中心を選んだ人の人数を回答者数で割った百分率であり、以下同様のものとして計算し、小数点以下1桁まで表示した。「文法」項目以下6項目の合計が100%を超えているのは複数回答した者がいるためである。

### 3. アンケート調査の結果

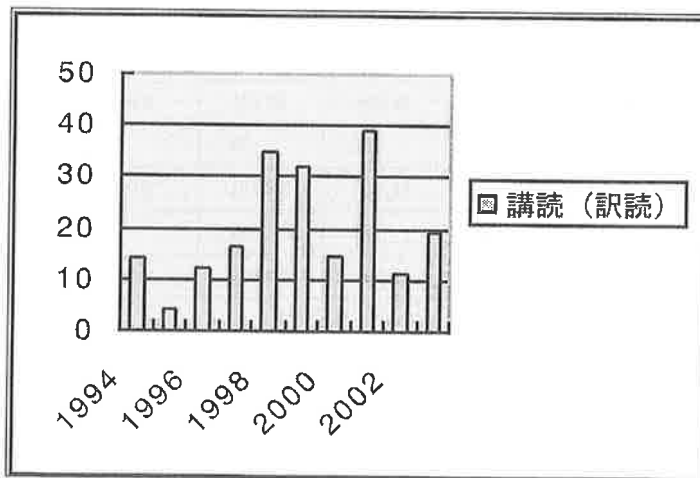
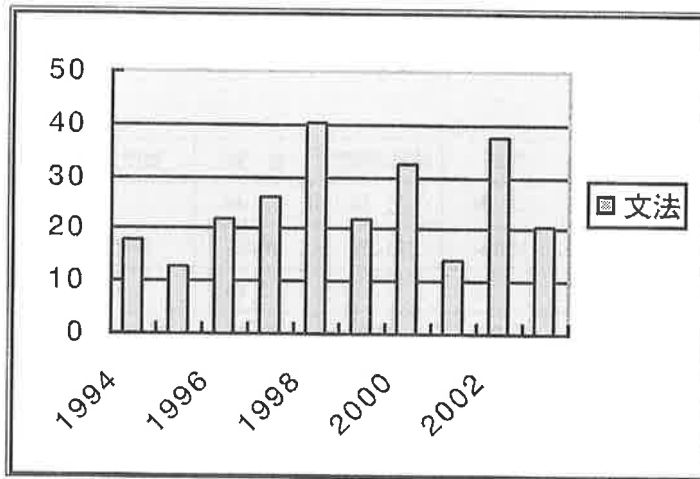
#### 開講時挙手アンケート

どのような項目に重点を置いて受講したいのか。（複数回答可）

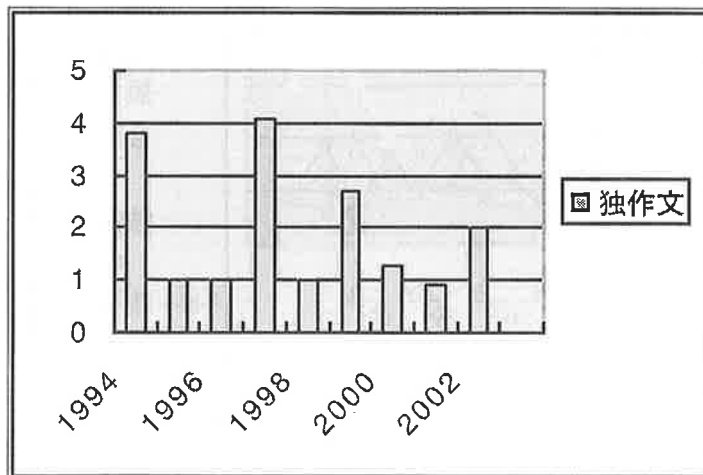
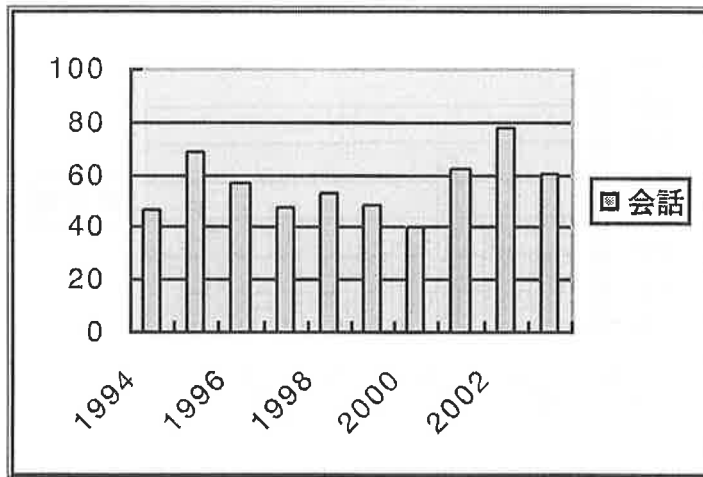
	回答者数	文法	講読(訳読)	会 話	独作文	教 養	その他
1994年4/18～4/28	105	19	15	49	4	68	2
	100%	18.0%	14.2%	46.6%	3.8%	64.7%	1.9%
1995年4/17～4/20	92	12	4	63	1	19	0
	100%	13.0%	4.3%	68.4%	1.0%	20.6%	0.0%
1996年4/18～4/22	96	21	12	55	1	27	0
	100%	21.8%	12.5%	57.2%	1.0%	28.1%	0.0%
1997年4/10～4/14	73	19	12	35	3	34	0
	100%	26.0%	16.4%	47.9%	4.1%	46.5%	0.0%
1998年4/13～4/15	92	37	32	49	1	21	0
	100%	40.2%	34.7%	53.2%	1.0%	22.8%	0.0%
1999年4/12～4/15	72	16	23	35	2	14	0
	100%	22.2%	31.9%	48.6%	2.7%	19.4%	0.0%
2000年4/10～4/17	75	24	11	30	1	22	1
	100%	32.6%	14.6%	40.0%	1.3%	29.3%	1.3%
2001年4/12～4/18	105	15	41	66	1	7	0
	100%	14.2%	39.0%	62.8%	0.9%	6.6%	0.0%
2002年4/15	96	36	11	75	2	26	0
	100%	37.5%	11.4%	78.1%	2.0%	27.0%	0.0%
2003年4/11～4/14	97	20	19	59	0	17	0
	100%	20.6%	19.5%	60.8%	0.0%	17.5%	0.0%

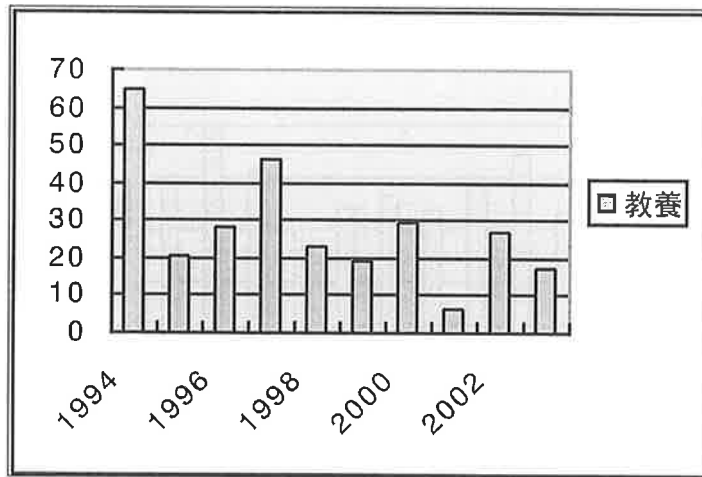
（注）「複数回答可」のためパーセントの合計が100%を超えている。

以下，その他の項目を除いて項目別に，割合を経年変化のグラフで表わすと，

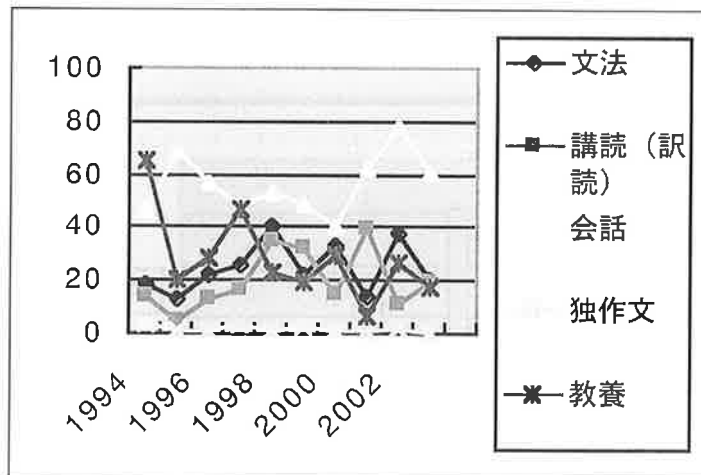


八戸工業大学のドイツ語教育（小林）





以上の結果を項目別に折れ線グラフで表わすと、



(注) 「その他」は1994年1.9%，2000年に1.3%であとは0%なので省いている。

4. 調査結果から導き出されるもの

以上の結果を見ると、各年度におけるアンケートの対象者である1学年の総数は72名～105名の範囲で、項目受講希望者の割合は、

文法は	13.0%～40.2%
講読（訳読）は	4.3%～39.0%
会話は	40.0%～78.1%
独作文は	0.0%～ 4.1%
教養は	6.6%～64.7%
その他は	0.0%～ 1.9%

の間の数値となっている。

10年間の結果を一つにまとめると、1学年の回答者の総計903名で100%とすると、

文法選択者	219名, 24.2%
-------	-------------

講読（訳読）選択者	180名, 19.9%
会話選択者	516名, 57.1%
独作文選択者	16名, 1.7%
教養選択者	270名, 29.9%
その他選択者	3名, 0.3%

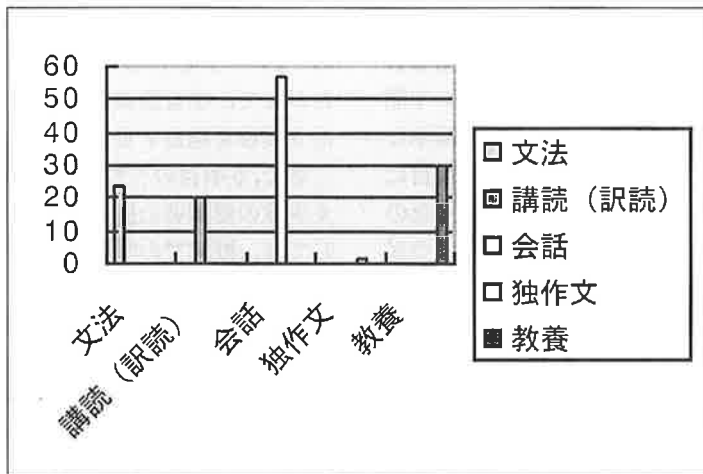
である。

2001年～2003年の3年間に限ると、

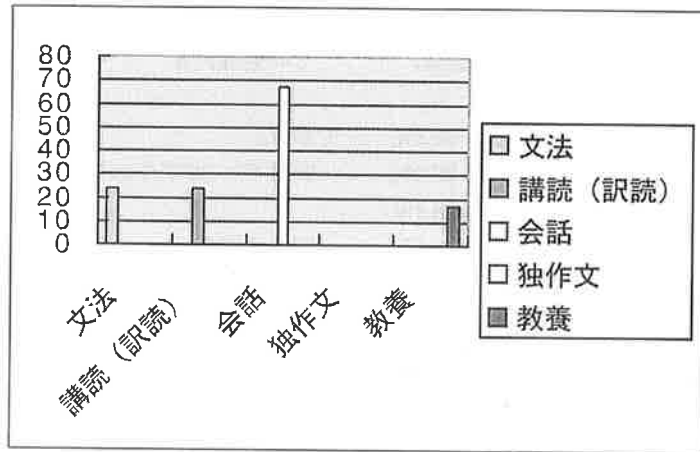
回答者総数	298名
文法選択者	71名, 23.8%
講読（訳読）選択者	71名, 23.8%
会話選択者	200名, 67.1%
独作文選択者	3名, 1.0%
教養選択者	50名, 16.7%
その他選択者	0名, 0%

となる。

10年間の総計を項目ごとにグラフで表わすと、1994年～2003年（その他の項目は省略）



3年間の合計を項目ごとにグラフで表わすと、  
2001年～2003年（その他の項目は省略）



この結果から明らかになることは、10年間をまとめて見ても約57%，最近3年間をまとめて見ても約67%と、最も学びたいものが他の項目を圧倒して会話だということである。このことは特に強調しておきたい。そしてつぎの教養の項目は、年によって大分差があり、最大値約65%，最小値約7%である。これだけ希望者数の差が大きいのはこの項目だけである。10年間を通して見ると、約30%で2位を占め、高率なのであるが、最近3年間では約17%と4番目に低下している。以前比較的希望者が多かったのが、最近減少したということになる。そのつぎの文法の項目は、10年間を通して見ても、3年間を通して見ても、平均値約24%と比較的安定した数の希望者がいると言える。10年間を通して見た方では3位に位置し、3年間を通した方では同率2位に浮上している。講読（訳読）の項目も最大39%，最低約4%と年によって開きがあり、10年間を通した平均は約20%で4位、3年間を通しては約24%で同率2位となっている。いずれにしても、文法と講読（訳読）の項目の希望者の数は、平均値が近いところにある

ことがわかる。つぎの独作文を希望したのは10年間を通した累計で15人、3年間を通して見ても3人で、双方とも2%未満の数字で、希望者がほとんどいないことを示している。最後のその他の項目は、10年間累計で3名、ここ3年間で0名であり、いずれの場合も0%とみなせるので、データとしては考慮しないことにする。したがって、学習重点項目としてはその他を除いた5項目を想定することになる。

さて、5項目のうち、独作文を希望しているごく少数の受講者の扱いなのであるが、教師側としては、授業での学習重点項目の設定など教授法上大変困るのであるが、最大約4%、10年間および3年間をまとめた値が2%未満の希望者数ということを考えると、通常の授業では独作文学習の形式を取ることは断念せざるをえない。特殊なケースにおいて独作文形式の授業をやることもあるが、初学者用の授業では通常取り入れないということである。



## 5. 授業への活用

ここまで述べてきて、それではこのようなアンケートの結果を踏まえて、どのような授業をここ10年間実施してきたのか、また現在実施しているのか、そして今後実施していくのか、八戸工業大学のドイツ語教育のあり方を考え、方向性を決定していく上で重要なことだと思うので以下に記してみたい。

上述の結果ですでに明らかになったことであるが、10年間あるいは最近3年間の重点項目希望者数の回答者総数に対する割合が57%を上回っているのは会話の項目である。受講学生の半数近く、あるいは半数以上がドイツ語会話を望んでいるのであり、当然初学者用の導入部分としてのドイツ語授業は会話中心でなければならぬ。また、10年間を通じての割合約30%、ここ3年間を通しての割合が約17%の教養項目も、ある程度の数の受講学生が教養中心の授業を期待しているということなので、いわゆる語学の授業だけではなく、ドイツ語圏に関する知識やドイツの実情に触れる必要がある。無論、ことばそのものの勉強である外国語学習は、ことば中心の学習を行うのであるが、そのことばに関連した、あるいはことばを支えている当該言語の教養的なものを抜きにしては本当の実力がつかない。学習者の動機付けの持続と強化にも関係するものとして外国語学習には欠かせないものである。いわゆる語学、ことばそのものの教育とのバランスを考えながら適宜取り上げていく必要があるものである。その意味で、会話項目に教養項目が附随し、連動していくのは初学者外国語教育として自然な成り行きとも言える。

文法項目と講読(訳読)項目に重点を置いての学習を選択した受講学生が、10年間およびここ3年間を通しての調査で20%~24%ぐらいというのは、これもある意味自然な初修外国語に対する態度の結果と言える。講読(訳読)というのは、文法を前提にしている、辞書を引い

て単語を調べ訳していくという手順を踏み、どちらかという、文章から、あるいは別な言葉で言えば、眼から入っていく学習となる。会話中心の学習が音声から、あるいは耳から入っていく学習法であれば、文字から入っていく方法ということになる。

報告者は1988年頃まで文法・訳読法の授業を行ったことがあるので、経験上わかるのであるが、文法・訳読法の授業ならその授業形態で通せば、辞書を引いて何とか単語の意味を調べ、文章の大体の意味をつかめるようになるのであって、徹底して文法・訳読法でやっていけばそのような実力はつくのである。しかし、文法・訳読法で学習すると耳からの音声教材中心のドイツ語力はほとんど身に付かないのである。したがって、初学者には、会話中心なら会話中心、文法・訳読法なら文法・訳読法というように、どちらかに方針を定めて徹底してやらせた方が明らかに効果があるものと考えている。勿論、これは週一回90分の授業のケースであって、90分週二回以上の授業の場合はまた別である。

アンケートの結果を踏まえると、会話中心の授業にならざるをえないので、この講読(訳読)という方法は、初学者に対する授業方法としてはできるだけ避けて、やむをえない場合に取るというようにしている。文法項目についても、会話中心の授業においてはできるだけ学習項目として出さないように心掛け、本当に必要最低限の文法事項の説明にとどめるようにする。つまり、教授する側としては、アンケート調査の結果に基づき、授業方針を会話中心と決めたので、文法および講読(訳読)は会話の基礎をある程度学んだ後で入れていくという行き方を取るのである。会話中心の授業を行いつつ、初修外国語ドイツ語の音声に慣れさせ、外国語であるドイツ語の音声による運用力がある程度身に付いた段階で、文法や講読(訳読)の授業を徐々に行うという方法である。もう少し端的に言うと、会話中心の方針のもと、会話学習と並行して教養学習を行い、教養を含む会話中心の学習の後、

文法・講読（訳読）学習をやるという順序になる。具体的には、ビデオ教材を使用した教養項目を含む会話中心の授業であり、文法や講読（訳読）は授業の進行状況を見て適宜取り入れていくという方法である。

## 6. おわりに

以上述べてきたように、1年生開講時アンケートを有効に授業に活用し、今後もより一層の教授法の改良を目指したい。この報告が大学における教育向上に少しでも役立てば幸いである。